

# 授業力向上のための校内研修体制の構築

## －メンターの育成と活用を通して－

教職実践応用領域 学校づくり履修モデル  
三浦 義広

### I はじめに 一資質向上に関する社会的背景一

近年、教員年齢構成が30歳未満の層と50歳以上の層に二極化をしている傾向がある。平成22年度の学校教員統計調査(愛知県)の年齢別構成比によると、30歳未満19.9%, 50歳以上が39.7%になっている。教員構成の二極化は生徒指導や学級経営・授業づくりなど複雑化する教育の諸問題に十分対応しきれない状態になると危惧されている。

本校においても若手教員が職員構成の半分を占めるようになってきており、職員全体で支援をしていく必要に迫られている。こうした状況の中、平成24年8月の中央教育審議会の答申では、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」において、「複数の先輩教員が複数の初任者や経験の浅い教員と継続的、定期的に交流し、信頼関係を築きながら、日常の活動を支援し、精神的、人間的な成長を支援することにより相互の人材育成を図る『メンターチーム』と呼ばれる校内新人育成システムを構築している教育委員会もある」と紹介してある。こうした取り組みを本校でも取り入れていくことは「授業力の向上」「校内現職研修の活性化」などを目指した校内組織の改善に有効に働くものと考えられる。

### II 自校分析について

#### (1) 地域の特色と保護者について

本校は1973年(昭和48年)に開校をした市内では比較的歴史の新しい学校である。児童数は314名、クラスは13学級(内特別支援学級1)の中規模な学校である。昔からの漁師町の風情を残しており地域住民とのつながりも深い。しかし、近年都市化の進行により新しく地域に移り住んできた保護者も増えている。さまざまな価値観をもった保護者に十分対応しきれず、悩みを抱え込んでしまう教員もみられる。保護者とのトラブルやその解決に向けての努力も、精神的・肉体的な多忙感の原因の一つとなっている。

#### (2) 教職員の構成について

本校は各学年2クラスである。学年配当は30～40代の年齢層である学年主任と若手教員という組み合わせになっている。本年度の職員構成は下の通りである。ここ2～3年で20代の若手教員が増え学級担任

|    | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 合計 |
|----|-----|-----|-----|-----|----|
| 男性 | 2   | 0   | 2   | 0   | 4  |
| 女性 | 3   | 3   | 2   | 0   | 8  |

の半数近くを占める状況となった。若手教員は、授業づくりはもちろんのこと学級づくりや保護者対応で多くの課題を抱えている。このような課題に対して学年主任が積極的に解決に向けての助言をおこなっている。しかし、「メンター的」な立場にある中堅層においても校務分掌だけでなく対外的にさまざまな用務をこなしており、若手教員の支援に十分に手がまわらない状況にある。

#### (3) アンケートから見る校内研修に対する意識

現職研修に対する意識を調べるために、平成24年1月にアンケート調査をすべての教員を対象に行った。その内容については、このアンケート結果から次のような課題が浮き彫りになった。

○本校の「研究の基本計画」について職員の共通理解が不十分な面が見られる。

○本校における校内研修、特に研究授業の計画や運営において、有効に機能しているとはいえない状況がある。

これらの課題の要因として次の3点があげられる。

①平成18年度より研究主題が変更されずに「マンネリ化」しており、平成22年度より研究の対象領域が道徳だけでなく、学年の意向により算数や社会などさまざまな教科に拡散してしまったこと。

②研究推進委員会のメンバーが各隣学年部会1名の選出であり、各学年へ協議の内容が十分伝わらなかったこと。

③10回以上の研究授業を行ったが、ややもすると研究授業を行うことが目的となってしまったこと。

#### (4) 児童について

下は平成22年度に実施したC R Tの結果である。

|                        |            |    |            |
|------------------------|------------|----|------------|
| 4年以上の平均得点率( )は全国の平均得点率 |            |    |            |
| 6年・国語                  | 80.0(79.3) | 算数 | 71.9(68.2) |
| 5年・国語                  | 73.5(73.9) | 算数 | 74.0(70.5) |
| 4年・国語                  | 80.0(76.1) | 算数 | 77.0(72.4) |

5年生の国語がわずかに全国平均を下回る結果になっているが、それ以外はおおむね全国平均を上回る結果になっている。本校児童の基礎学力についてはおおむね満足できるレベルであると言える。

その反面、平成23年度の学校評価における児童用のアンケートの結果を見ると「授業中に真剣に取り組

むことができていない」と回答をした児童が25%、「よく手を挙げて意見を発表できていない」と回答した児童が35%となっている。「授業に興味を持てない」「授業に積極的に関わっていない」という児童が30%ほどいる実態も見えてきた。

### Ⅲ 校内研修における課題

#### (1) 研究の基本計画【課題1】

年度末の研究推進委員会において研究主題の成果と課題の振り返りが十分行われていなかった。また、児童の実態を踏まえた研究主題となるような検討がされていなかった。さらに、研究授業の年間計画が十分に検討されず、時期の調整がきちんと行われていなかったため、ある時期に授業が集中していた。これらの課題を改善していくための手だてとして、研究推進委員会が中心となり、研究主題から根本的に見直していくことが必要である。

#### (2) 研究体制【課題2】

「研究の基本計画」における課題の第1の原因は研究推進委員会が十分に機能していなかったことにある。これまでの研究推進委員会は、各隣学年部会の学年主任のうち1名が委員となるというもので、必ずしも研究を意識した人選ではなかった。また、若手教員が入ることもなかった。

そこで、研究推進委員会の中堅教員を委員として研究の中心に据えることで、研究推進委員会の活動を活性化させる。また、こうした教員が研究の中心的な役割を果たすことによって、中堅教員の研究能力育成の場として機能させる。さらに若手教員も委員として入ることで、若手の研究に対するモチベーションを高めることができ、同時に、中堅教員の指導的力量的育成の場とする。

第2の原因として研究授業のつながりが明確でないことがあげられる。本校では、全職員が参観する「全体研」、隣学年部会のメンバーが参加する「部会研」と「全体研」「部会研」の授業者以外が行う「個人公開授業」の3種類の研究授業がある。こうした研究授業は全体研と部会研がそれぞれ年3回、個人公開授業は年間6回行われている。平成23年度に行われた研究授業の成果と課題は右上の<表1>の通りであった。それぞれの研究授業の目的やねらいが不明確で、3つの研究授業のつながりが十分考えられていなかった。

こうした一つ一つの研究授業をつなぐ役割は、研究推進委員会にある。授業と授業をつなぐために研究推進委員会の役割をはっきりさせ、学校の研究の中心的な組織として機能をさせていくことが課題である。

さらに「個人公開授業」についても若手教員の授業づくりを具体的に支援していく必要があるが、せっかく優れた授業を中堅教員が行っていても、意見交換や検討する場が設けられていなかったことも課題としてあげられる。

| 【<表1>全体研・部会研・個人公開授業の成果と課題】 |   |  |
|----------------------------|---|--|
|                            | 成 果   | 課 題                                      |
| 全体研                        | ・校内の研究について全員が共通理解する機会になっている。<br>・他教科・領域など幅広い授業づくりの研修になっている。 | ・全員で協議をするため、一人一人の課題が解決されにくい。             |
| 部会研                        | ・児童たちの実態を捉えた授業づくりができる。<br>・専門教科以外での授業づくりについての学びにつながる。       | ・課題についての学びは深まるが、検討されたことが職員全体に共通理解されにくい。  |
| 個人公開授業                     | ・若手教員にとって、授業づくりの基礎・基本を学ぶ場になっている。                            | ・授業後の情報交換の場がない。必要があれば、授業者や参観者が自主的に協議を行う。 |

#### (3) 研究授業【課題3】

平成23年度は「全体研」「部会研」「個人公開授業」を合わせて12回の研究授業が実施された。どの授業もそれぞれ指導案はあるが、授業を見るための具体的な視点がなく、公開授業相互のつながりがはっきりしないという課題があった。

また、新任教員が2名、20代の若手教員が3名という本校の職員構成を踏まえ、研究推進委員会の協議の中で、若手教員が「1時間の授業のどこを見ればよいか」という「授業を見る視点」が十分理解されていないことが話し合われた。本年度は若手教員と中堅教員がペアになった学年体制となっている。さらに中堅教員は全員が学年主任になっている。すなわち学年経営と授業づくりを一体化させることで、こうした中堅教員が若手教員の「よき理解者」となるような「メンター教員」としての役割をもたせていくことが可能であると考ええる。若手教員だけに研究授業を行わせるのではなく、メンター教員も積極的に研究授業を行っていく体制を作ることとともに授業について考えるシステムを作っていくことが必要である。研究推進委員会を中心とした授業づくりを通して、若手教員に刺激を与えると同時に、メンター教員自身も成長し教え合い学び合う研修体制の充実が図られると考えられる。

### Ⅳ 課題研究のテーマについて

【課題1】～【課題3】をふまえ、課題研究のテーマを次のように設定した。

**授業力向上のための校内研修体制の構築**  
－メンターの育成と活用を通して－

### Ⅴ これまでの先行研究

栃木県教育センターでは「組織力の向上を図る校内研修の充実」という内容で研究報告書を発表している。

その項目の「校内研修改善のための視点」として次のことが挙げられている。

- ①機動的な組織づくりの工夫について
- ②課題の明確化と計画立案について
- ③改善につながる評価に工夫について

この3点については、本校における研究組織の改善やねらいをもった年間計画の設定、授業シートや事後検討会の改善に向けて参考になると考える。

## VI 研究計画

### 1 研究の基本計画の見直し【課題1の手だて】

#### (1) 研究主題の振り返りと検討

平成23年度中に、本年度の研究の成果と課題について隣学年部会で検討する。その後、研究推進委員会で、隣学年部会での協議をもとに、平成24年度の研究の方向性について話し合いをもつ。児童の実態を踏まえ、研究主題の見直しを行っていく。職員アンケートの結果も踏まえながら、道徳、理科、社会の教科についても見直していく。

#### (2) 研究授業の年間計画

研究推進委員会が中心となって日程調整を行い、バランスのとれた計画を作成する。平成23年度の研究授業の課題として以下の点が挙げられた。

- ・研究授業の実施時期が行事などの関係で、6月、10月、11月に集中した。
- ・時期が集中したため、研究授業をじっくりと検討することができなかった。

そこで、改善の方向性として5月や9月といった比較的行事の少ない時期に全体研を実施する。研究授業の年間計画を見直し、ねらいを明確にした研究授業を実施する。さらに、6月24日に予定されている学校訪問の全体研も計画に組み入れる。

以上、研究推進委員会が中心となって作成する「研究の基本計画」については、研究推進委員会が職員会に提案し、平成24年度の研究の基本計画を職員全体で共通理解を図るようにする。

### 2 研究体制の見直し【課題2に対する手だて】

#### (1) 研究推進委員会の在り方の見直しと役割の明確化

本校には、校内研修全体の基本的な方向を決める現職研修委員会と、研究授業についての指導案検討や調整を行う研究推進委員会がある。平成24年度の研究推進委員会を次のように改善していく。

##### <メンバー構成>

- ・平成24年度以降、若手教員の増加により学校全体で若手教員を支えるために、チームで授業づくりについて考える。若手教員も研究推進委員会に入ること、授業づくりについて学ぶ機会になると考える。そこで、各学年から1名を研究推進委員会のメンバーとする。メンバーの構成については、若手教員2名、メンター教員を4名とする。

##### <研究推進委員会の機能>

- ・メンター教員が授業づくりの協議において、これまでの学びや経験を語ることで、若手教員が授業づくりに対する見方が広がる。メンター教員が授業について若手教員とともに振り返ることで課題が見えてくる。その課題を解決することで、メンター教員も成長をする。研究推進委員会での協議が学びの場となるような機能をもたせるようにする。

さらに、<表2>のように研究推進委員会と隣学年部会の役割を明確にし、研究推進委員会が学校の研究の中心となって動いていくように、研究体制の改善を図っていく。

【<表2>研究推進委員会と隣学年部会の役割】

##### ○研究推進委員会

- ・研究の基本計画の作成
  - ・研究授業の年間計画の作成
  - ・指導案の検討
  - ・研究紀要の作成
- (隣学年部会で話し合われた指導案の最終的な検討)
- ・授業づくりについての支援
  - ・授業シートの活用と分析・事後検討会の運営(主に全体研)
  - ・メンター教員の活用と育成・若手教員の授業づくりの支援

##### ○隣学年部会

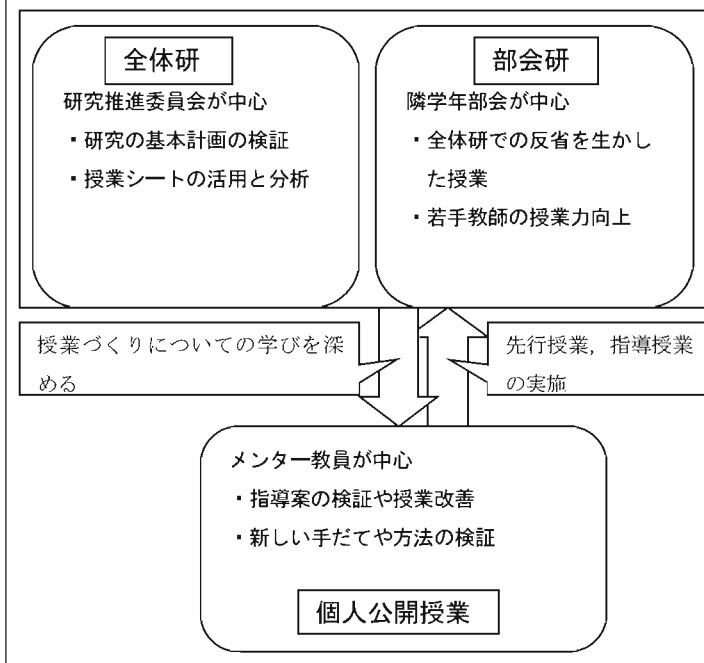
- ・指導案の作成、授業づくりについての助言
- ・教材の作成
- ・事後検討会の実施(部会研など)

#### (2) 各研究授業のつながりと目的の明確化

##### ①全体研・部会研・個人公開授業のつながりと目的の明確化

改善の手だてとして、「個人公開授業」と「全体研」・「部会研」の研究授業を<表3>のように関連させたものにしていく。

【<表3>「全体研」「部会研」と「個人公開授業」との関連】



### ③メンター教員による個人公開授業

「個人公開授業」をメンター教員の指導授業もしくは同じ指導案で行う先行授業として位置付ける。

## 3 研究授業の改善【課題3に対する手だて】

### (1) 授業シートの活用と分析

新任教員が2名、20代の若手教員が3名という本校の職員構成を踏まえ、研究推進委員会の中で協議されたことに、若手教員が「1時間の授業のどのような点に気をつけて参観すればよいか」という「授業を見る視点」が十分理解されていないことが課題としてあげられた。これらの課題を改善するため、授業シートの活用を図っていく。

授業シートの活用を通して、それぞれの授業を共通の視点で見ることができる。また、授業シートの分析を通して、その授業における課題を見つけることができる。このような取り組みを通して、授業の改善や日常の実践を振り返るきっかけになると考えられる。

授業シートの項目については、研究推進委員会で検討をしていく。作成にあたっては「本校でどんな授業をめざしていくのか」という研究の基本計画に従って共通理解を図りながら作成していく。活用方法としては、授業シートの分析や集計を通してそれぞれの公開授業がつながりのあるものにし、成果や課題を次の授業にいかせるようにしていきたい。

授業シートには研究だけでなく、授業づくりにかかわる内容も取り入れることで自分の授業を振り返り、改善していけるようにする。また、授業シートを分析することで、次の研究授業への改善につなげていけるようにしたい。さらに、授業シートは定期的に研究推進委員会で検討し、本校の実態を踏まえたものに改善をしていくように工夫する。

### (2) 事後検討会の充実について

24年度は、全体研の事後検討会の改善を行う。昨年までの事後検討会の課題として次のようなことがあげられた。

- ・全員が参加するが、感想が中心になってしまい授業改善にむけての具体的な提案が少ない。
- ・若い先生方の発言が少なく、一部の先生に偏りがみられる。

これらの課題は、研究の基本計画がはっきりしておらず、授業を改善していくための視点が具体的ではないことが原因としてあげられる。そのため、従来の事後検討会では、本校職員の授業づくりの経験や学びを引き出すことができず、研究が深まっていけないと考えられる。

課題を改善していくための方法として、事後検討会の協議会をワークショップ型にする。メンバーは各隣学年部会を基本にして、司会を研究推進委員に依頼をする。そして、小グループを編成して、若い先生方も含め一人一人が十分議論に参加できる環境をつくる。

また、授業シートを活用しながら、授業の改善について活発な協議ができるようにしていきたい。新しい事後検討会を通して、授業づくりの基礎基本について一人一人が理解を深めていけるような協議会にしていきたいと考えている。

## VII 研究の実際

### 1 研究の基本計画の見直しへの取り組み

#### (1) 研究主題の振り返りと検討

##### ①平成23年度の研究成果と課題について

(平成24年1月～2月)

新しい研究の基本計画を作成する前に、平成23年度の研究についての成果と課題についての話し合いを隣学年部会で実施してもらうことを依頼した。そして、その内容を2月の研究推進委員会で集約した。成果と課題は下の<表4>の通りである。

| 【<表4>研究の成果と課題】               |  |
|------------------------------|--|
| 成果                           | 課題                                     |
| 操作活動や体験活動を通して、粘り強く考えることができた。 | 受け身的な児童たちの様子が見える。自分の考えを表現することが苦手な子が多い。 |

こうしたことをふまえ、平成24年度にむけて「児童が主体的な学びをすすめられる授業づくり」について話し合い、基本計画の骨子を固めた。

さらに、平成24年1月に実施したアンケートでも「学校全体や隣学年部会で教科を統一して研究をすすめる」という考えをもつ教員が約90%以上であった。こうした結果からも、平成24年は研究の教科を絞り、学校全体で授業づくりについて考えることが確認された。

##### ②基本計画の提案(平成24年2月～3月)

アンケートと課題についてそれぞれ整理し、見直していく中で、来年度にむけての基本計画の原案を検討した。作成した原案は隣学年部会で検討し、その意見を研究推進委員会で取りまとめ修正をしながら検討をすすめた。そして、平成24年度の研究主題を「主体的な学びを続ける子の育成」とした。また、授業づくりの中心課題としては「児童が『考えたい』『やってみよう』と思えるような教材や指導法の工夫」となった。決定した研究主題や中心課題は、平成24年度の研究授業の協議を通して、さらに共通理解を深めていくことも確認された。

研究推進委員会の協議の過程は、職員会において報告され、平成24年度に向けた研究の基本計画について職員全体で理解を深めた。

##### ③第1回研究推進委員会(平成24年4月5日)

新しい組織になって第1回の研究推進委員会が開かれた。この時は、研究の基本計画について話し合いをした。職員が入れ替わり、新しいメンバーが研究推進委員会に組み入れられた。そのため平成24年度の

研究の基本計画についてもう一度共通理解を図った。研究の基本計画については前年度に検討した内容で賛同を得ることができ、入れ替わったメンバーでも共通理解を深めることができた。

教科についても焦点化され、前期（４月から９月）の研究授業を「算数」、後期（１０月から３月）を「国語」とすることになった。

校長からも「本年度は若い先生が増えます。学年主任の先生にはメンターとしての支援をお願いします。」という話があった。学校の研究体制も、メンター教員を活用していくことが確認された。

④第２回研究推進委員会（４月１２日）

研究全体会で提案する前に、研究推進委員会で「研究の基本計画」の具体的な内容について再度話し合いをもった。さらに、本年度見直された研究の基本計画について共通理解を深める授業として、５月３１日に研究授業を実施することが決定された。

⑤第１回研究全体会（４月１６日）

研究全体会が開催され、これまでの研究推進委員会で検討された「研究主題」や「主体的な学びをする児童の姿」などの「研究の基本計画」について研究主任から提案された。平成２３年度より、研究推進委員会で何度も協議されてきたため、研究主任も職員に分かりやすく丁寧な説明をすることができた。

⑥隣学年部会での話し合いの様子（５月７日）

第１回全体研（５月３１日実施）に向けて隣学年部会で高学年部会の研究の基本計画について検討をした。この提案については、５月１０日に開かれる研究推進委員会にも提案し共通理解を得た。

（２）研究授業の年間計画について

４月１８日の第３回研究推進委員会では、研究授業の年間計画について検討がされた。年間計画については、昨年度の研究推進委員会の反省から、＜表４＞のように全体研のねらいを明確にして実施することになった。

| 【＜表４＞研究授業(全体研)のねらいについて】 |                       |          |                                   |
|-------------------------|-----------------------|----------|-----------------------------------|
| 第１回                     | ５月３１日<br>メンター         | ６年<br>算数 | 本年度の研究の方向性を示すモデル授業<br>「対称な図形」     |
| 第２回                     | ６月１８日<br>若手教員         | ６年<br>算数 | 第１回の研究授業の課題を踏まえた改善授業<br>「対称な図形」   |
| 第３回                     | ９月２０日<br>メンター<br>市指導員 | ３年<br>国語 | 国語の授業づくりのモデル授業<br>「ゆうすげ村の小さな旅館」   |
| 第４回                     | １２月６日<br>若手教員         | ２年<br>国語 | 本年度の研究の深まりを検証する授業<br>「名前をみてちょうだい」 |

第１回と第３回はメンターの立場にある先生に授業を依頼し、第１回全体研はモデル授業とするとともに６月１８日に行われる第２回全体研の先行授業として計画した。

第３回全体研は本市の国語科指導員による国語の授業づくりについて学ぶ授業として、その意義を明確化した。この指導授業をもとに、１０月２２日の部会研による若手教員の研究授業、１２月６日の全体研による若手教員の研究授業を計画した。

本年度の研究授業については、計画の通りに実施された。

☆ 研究の基本計画の見直しへの取り組みを

振り返って（○：成果、 ■：課題）

○平成２３年度の研究の基本計画を見直して、新しい研究の基本計画を作成した。また、研究の対象を国語と算数にした。教科を２つに絞った結果、手だてなども統一されつつあり全校体制で研究をすすめていくことができた。平成２４年１２月に職員を対象にしたアンケート調査でも約９０％の肯定的な評価をもらい、概ね理解を得ることができた。

■研究の基本計画をふまえ、前期を算数・後期を国語して研究授業をすすめた。同じく２４年に実施した職員アンケートで「平成２５年度の研究にむけてどのような改善をおこなっていけばよいか」を聞いた。１８名中１３名の教員が「学校全体で教科を統一して研究に取り組んでいくこと」と回答をしていた。アンケートの結果から、本年度見直した基本計画の改善がさらにもとめられている。「教科」の見直しを含め、「めざす児童の姿」の見直しや「手だて」の工夫など、さらに基本計画を充実していく必要がある。

２ 研究体制の見直しへの取り組み

（１）研究推進委員会の在り方を見直しと役割の明確化

平成２３年度の職員アンケートで「研究推進委員会では、授業研究の計画・運営について有効に機能していたか」という問いに対して、４０％の教員が十分でないという回答があった。そこで研究推進委員会から、２４年度のメンバー構成について教務主任を通して、企画委員会へ改善を依頼した。

その結果「若手教員もメンター教員とともに研究推進委員会のメンバーとなり、ともに授業について話し合うことでお互いの力量を高めていく」というねらいから、各学年１名と教務主任の７名体制になった。メンバーの構成についてもメンター教員（教務主任も含む）が５名、若手教員が２名という体制になった。

また、研究推進委員会と各隣学年部会との在り方を見直しと役割の明確化を図った。研究推進委員会は、学校全体にかかわる研究についての調整、全体研などの指導案の検討、事後検討会の役割分担など、学校全

体の研究をリードしていく立場を明確にした。

各隣学年部会は、研究の基本計画を受けた隣学年部会の計画の決定、児童の情報の共有化、指導案検討など主として若手の授業づくりの支援を中心に行うようにした。

## (2) 各研究授業のつながりと目的の明確化

### ①研究推進委員会における共通理解

4月の研究推進委員会で、年間4回実施される「全体研」のねらいや「個人公開授業」が若手教員の指導授業としての目的をもたせることについて確認がされた。

メンター教員には、若手教員よりも先行して研究授業を実施し、「指導案は児童の実態にあっているか」「児童の反応に対してどのように支援すればよいか」といった若手教員の授業づくりを支援していくように依頼した。

こうしたねらいを明確化させることで若手教員と協働して授業について考えていこうという意識が高まり、学年体制や隣学年体制で授業づくりをしていくことが確認された。

### ②メンター教員による個人公開授業

本校の研究は、10月から教科が国語になる。若手教員が授業づくりについて学ぶ場としてメンター教員（3年学年主任）による全体研を実施した。教材は「ゆうすげ村の小さな旅館」である。授業者は蒲郡市の国語科指導員である。

研究推進委員会での事前検討会では次の2点が授業の視点として協議された。

- ・話し合い活動の中で、友だちの意見を聞いて、自分の意見を積極的に発言できる。
- ・場面の移り変わりや人物の様子、気持ちについて教科書のことばを大切に想像豊かに読むことができる。

そのための具体的な手だてとして「ペア対話」「マインドマップの活用」がメンター教員から提案された。「ペア対話」は、児童の「話す・聞く力」を育成するための手だてとして、また「マインドマップの活用」は児童の考えを板書によって支えていくための一つの方法である。

授業後の事後検討会では「ペア対話」「マインドマップの活用」についての有効性について検討がされた。

#### 事後検討会での協議内容

- ・「マインドマップ」は、児童たちの考えや見方を広げるには有効な板書方法である。
- ・「ペア対話」「マインドマップ」はある程度授業では効果的に活用をされていた。しかし、ねらいや目的について十分吟味をして取り入れて行く必要がある。

他のメンター教員からも、国語における発問の方法や板書の仕方など授業づくりの基本について提案をし

てもらい、国語の授業についての学びを深めることができた。

### ③個人公開授業と部会研とのつながり

メンターによる指導授業の後に、若手教員による部会研の授業が行われた。この教員は新卒3年目である。また、国語の研究授業は初めてである。今回の研究授業を迎えるにあたって、メンター教員の指導案や授業展開を参考にしながら準備をすすめた。10月15日に行われた研究推進委員会では、メンター教員によって実施された全体研での協議を受けて、どのように授業を組み立てていくか事前検討会が行われた。教材は「サーカスのライオン」である。

#### 事前検討会での協議内容

- ・「ペア対話」をどのようなねらいで本時の中に位置づけていくかを明確にする。
- ・児童たちの読みの深まりをどこで検証していくかを明確にする。
- ・「マインドマップ」による板書のイメージをきちんともてていないので、板書計画を明確にしていくことが大切である。

研究推進委員会では、

- ・「ペア」対話はどのような点に気をつけて取り組めばよいか。
- ・授業でおこなう教材文の中で、登場人物の気持ちを考えるとき、どのようなことば（「キーワード」）に気づかせればよいか。
- ・児童が大切だと考えたことばをどのように板書していけばよいか。

といった、授業づくりについての具体的な協議がなされた。9月に授業を行ったメンター教員も自分自身の授業の反省を生かしながら、若手教員を支援することで、指導的力量を高めていった。

このような事前の協議を踏まえ、10月22日に隣学年部会の研究授業として実施された。事後検討会では次のようなことが協議された。

#### 事後検討会での協議内容（若手教員による授業）

- ・「ペア対話」は相手との対話を通して、自分の思考を整理している。また、自分の考えの似ているところや違う点について比較している。
- ・相手の声が十分聞き取れないことがあった。机を一つにして互いに近づいて話すなどの工夫が必要である。
- ・「マインドマップ」による板書が十分にできていなかった。どのような方法で板書を作っていけばよいか。もう一度研修を深める必要がある。

事後検討会を終えた授業者は、次のように本時を振り返っている。

児童たちから意見を多く発言させることができ、国語の授業での話し合いや板書など基本的な技術を学ぶ良い機会になった。しかし、「ペア対話」や「マインド

マップ」といった手だてを授業の中で十分生かし切れなかった。

## ☆ 研究体制の見直しへの取り組みを振り返って

(○：成果，■：課題)

○研究推進委員会の組織強化と役割の明確化により研究推進委員会での授業づくりにおける協議が活発化した。

○メンター教員が研究授業を発信することで、若手教員の授業を支援することができた。

○「全体研」「部会研」「個人公開授業」が指導方法や授業づくりの課題をもとに、つながるようになってきた。

○メンター教員も、より授業に対する学びを深め、若手教員との協働体制で授業づくりに取り組むことができた。

■隣学年部会の機能強化や模擬授業なども個人公開授業として取り入れるなど新しい取り組みが必要である。

■メンター教員の指導能力を高めていく研修が重要である。

## 3 研究授業の改善への取り組み

5月10日の研究推進委員会では第1回全体研に向けて、授業を見る視点作りのための「授業シートの活用と分析」、若手教員の授業づくりをより効果的に支援していくために「事後検討会の改善」について提案をした。

### (1) 授業シートの活用と分析

#### ①第1回全体研での取り組みの様子

全体研の研究授業の教科は「算数」である。単元名は「鏡を用いて新しい図形を作ろう(対称な図形)」とした。

今までは、授業の視点が書かれた用紙を配布し、参観者に気づいたことを記入してもらうことになっていた。

しかし、授業を参観しながらすぐに文章で記入するのは時間的にも難しいという課題があった。さらに、授業のどの場面を中心に参観すればよいかという具体的な視点がはっきりしていなかった。

こうした課題を解決するために授業シートの活用を提案し、内容について研究推進委員会で検討をした。

授業シートは、本校にとって初めての取り組みであったため、授業を評価されることに抵抗感をもつ意見もあった。そうした意見に対して、次の2点を説明し、理解してもらうようにした。

○授業を見る視点を育てる。

○授業シートの分析を通して研究がどの程度深まったのか、また授業づくりで改善すべき点はどんなことを明確にすることができる。

さらに、協議の結果「観点が10項目では見る視点多すぎる」という意見もあり原案が修正され、次の

3項目に変更された。〈授業シート参照〉

○児童が「考えたい」「やってみたい」と感じるような教材の工夫をしているか。

○なぜそう考えたか、根拠や理由を明確にした発言ができるような支援があるか。

○教具の工夫やICTの活用・操作活動を取り入れるなど指導方法の工夫をしているか。

| 【授業シート】                                  |         | 授業を参加して、A～Eまで即時評価ができるようにしてある。 |   |   |   |   |
|--|---------|-------------------------------|---|---|---|---|
| 手だて                                      | 授業を参観して | A                             | B | C | D | E |
| 1 子どもが「考えたい」「やってみたい」と感じるような教材の工夫をしている。   |         | ○                             |   |   |   |   |
| 2 課題の解決のための既習事項が使えるような工夫がされている。          |         |                               |   |   |   |   |
| 3 子どもたちの様々な考えを引                          |         |                               |   |   |   |   |
| 4 補助発問等で思考を広げ                            |         |                               |   |   |   |   |
| 5 子どもたちの学習状況を把握し、思考や活動に適切な時間をとっている。      |         |                               |   |   |   |   |
| 6 なぜそう考えたのか、根拠や理由を明確にした発言ができるような支援がある。   |         |                               | ○ |   |   |   |
| 7 教具の工夫やICTの活用・操作活動を取り入れるなど指導方法の工夫をしている。 |         | ○                             |   |   |   |   |
| 8 1時間の学習の流れが分かるような板書になっている。              |         |                               |   |   |   |   |
| 9 子どもたちのつまずきを予想ができて                      |         |                               |   |   |   |   |
| 10 机間指導等を行い、個やグループ                       |         |                               |   |   |   |   |
| 切な指導をしている。                               |         |                               |   |   |   |   |

ではまる B：やや当てはまる C：やや当てはまらない D：当てはまらない E：該当なし

本校で、初めてのとりくみであったため、項目を3つに絞ってシートを作成した。

気づいたことを自由に書き込むことができる欄も作成した。

子どもたちが積極的に課題に取り組んでいた。教具が工夫されており、どの子も自由にやれていた。主眼問に対して、2人3人で意見が出され、気づきが繰り返され、キーワードを導いていた。

実際の授業では、「大型テレビやコンピュータを導入に取り入れた授業」「線対称の軸に鏡を置き、さまざまな試行錯誤を通して、新しい図形を作る操作活動」や「作った図形を提示しながら、自分なりの根拠を明確にした話し合い活動」が展開された。参観者はこの授業シートを手元に置いて授業を見た。

### (2) 事後検討会の充実について

#### ①事後検討会の改善の提案

本校の今までの全体研の事後検討会は、「口の字」の形に机を配置し、全員で話し合う形式になっていた。こうした協議会の課題として次のようなことあげられる。

○全体での協議のため一人一人の発言が少ない。

○授業の感想が中心となってしまう、研究についてふみこんだ協議ができない。

○年齢や経験年数に対する遠慮から、考えを発言することにためらいがある。

そこで、これらの課題を解決していくために、全体

研でワークショップ型授業研究会を導入した。

また、メンターの立場の教員が自分の経験や学びを語ることで、若手教員もより学ぶ機会が増えるのではないかと考えた。

事後検討会の方法については、5月10日の研究推進委員会で提案し、進め方について協議を行った。

## ②事後検討会の様子

第1回の全体研の後に事後検討会を行った。1グループ4人の協議会であったので、それぞれのグループ多くの内容について協議され、次のようなことが話し合われた。

- ・今日の授業で児童たちの意見を共有するためにどのような支援をしたか。
- ・ICTを活用することで児童たちの学びにどのような変化があったか。
- ・自分の意見を書けない子へのどのような手だてが考えられるか。

本時の授業について授業シートをもとに様々な意見が交換された。若手教員も多くの質問や意見が出された。

ワークショップ型の事後検討会に初めて参加した若手教員は次のように述懐している。

- 15分の時間があっという間に過ぎてしまった。
- 普段はなかなか聞けない内容でも、詳しく聞くことができ、授業に対する見方深まった。

## ③第2回全体研にむけての取り組み

第1回の全体研での協議を通して明確になった課題をふまえて、第2回全体研が行われた。第2回全体研は、第1回全体研で実施された学年と同じである。

6月7日に研究推進委員会を開き、指導案についての事前検討会を行った。第1回全体研の事後検討会で協議された課題を改善したことで、児童の主体的な学びをより意識した授業になった。

授業者も、第1回全体研で授業の様子を参観していたので、どのように授業を組み立てていけばよいかのイメージをもつことができた。

## ④第2回全体研の改善された点について

第1回全体研での課題をどのように改善したかを確認するために授業シートによる分析を行い、結果を表した。

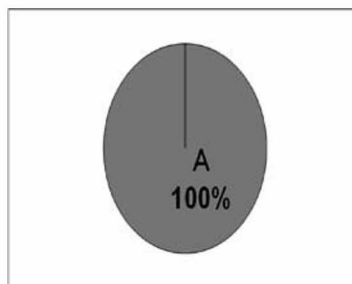
シートは全て

「A：当てはまる Bやや当てはまる C：ややあてはまらない D：あてはまらない E：分からない」

の5つから回答を依頼した。

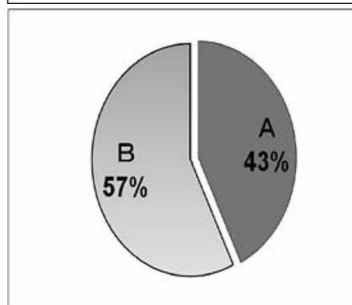
【回答人数は7人】

**観点1** 児童が「考えたい」「やってみたい」と感じるような教材の工夫をしている。



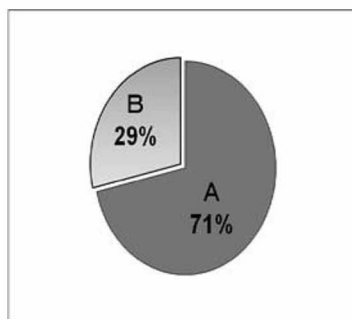
「当てはまる」と回答した教員が100%であった。第1回の全体研では75%であった。児童にとって身近な対称図形を教材化し、興味・関心を高めるための工夫がされていたことが分かる。

**観点2** なぜそう考えたのか、根拠や理由を明確にした話し合いをしている。



観点2は、2つを合わせて100%になった。今回は、少人数のグループでの話し合い活動を取り入れた。このことが自分の考えを深めることに繋がったと考える。

**観点3** 教具の工夫やICTの活用・操作活動を取り入れるなど指導方法の工夫をしている。



観点3は、「当てはまる」が71%、「やや当てはまる」が29%であった。やや厳しい評価になっている。

第1回の全体研と比べて、観点3については、やや数値は悪化した。観点1と観点2については、大きく改善をした。教材の内容や展開の方法、意見のかかわらせ方など様々な改善策について隣学年部会や研究推進委員会で協議を重ねてきた。こうした取り組みを通して、若手教員も授業に対する見方や考え方を深めることができた。

## ☆ 研究授業の改善への取り組みを振り返って

○授業シートの活用を通して、授業のねらいを明確にした授業参観ができ、手だてがきちんと達成されているか数値化して検証ができた。

○事後検討会の改善を通して、授業に対する見方が積極的に交換をされ、授業づくりについての研修を深めることができた。また、メンター教員を協議会の司会にしたことで、若手教員も積極的に発言することができた。

■事後検討会では授業の問題点についてさまざまな指摘があったものの、建設的でなく、具体性に乏しい意見もみられた。ワークショップ型事後検討

会の方法について学習する研修会をもうけ、具体的な授業改善につながる考えが提案できるような検討会にしていく必要がある。

## VIII 若手教員とメンター教員の意識の変容について

### (1) 第1回全体研と第2回全体研

今回の取り組みを通して若手教員とメンター教員が授業づくりに対してどのような意識の変容があったか指導案を通して検証する。

導入部分における、第1回と第2回の活動のねらいは、下の<表6>のように改善を図った。

| 【<表6>導入における活動のねらい】                                    |   |
|---|---|
| 第1回全体研（メンター教員）  | 第2回全体研（若手教員）  |
| ・「逆さ富士」の写真を大型テレビに映し、気がついたことを話し合うことで、線対称に対する興味・関心を高める。 | ・具体的な「ピザ」の大きさを鏡によって変える活動にした。鏡を使う活動が授業の展開部分とのつながりをもたせるようにした。 |

さらに、第1回全体研の展開部分における課題として次の2点が指摘された。

■抽象的な図形を教材として扱っていたので、児童の生活意識と乖離している。

■「個人追究」のあとすぐに「全体での話し合い」活動であったため、児童が自分の考えを熟成させることができず、表面的な追究活動になっていた。

そこで、若手教員は第2回の全体研に向けて

○身近にある様々な形を授業で取り上げる。

○グループでの話し合い活動を取り入れることで、自分の考えを見直し、児童たちが自信をもって発言できる。

と考え、授業を改善した。

研究授業を終え、取り組みを振り返りながら若手教員は次のような意見を述べていた。

- ・子どもの興味や関心を高める教材とはどのようなものであるか。今までの考えを見直すきっかけになった。
- ・授業づくりに対して不安な気持ちがあったが、メンター教員や隣学年部会の支援があったので、安心して取り組めることができた。

メンター自身も若手教員とともに教材開発をすることで、今までの考えを反省し、授業づくりの視点を広げることができた。

今回の実践を振り返ると、メンターの「活用」という視点では一定の成果をおさめたが、「育成」という点では課題が残った。今後はメンター教員を対象とした若手教員を育てていくためのコーチングやファシリテーターの役割をより深く理解していくための研修会を企画するなど授業づくりだけでなく、人を育てていくための幅広い知識や技術を学ぶ機会を設けていくことが必要であると考えた。

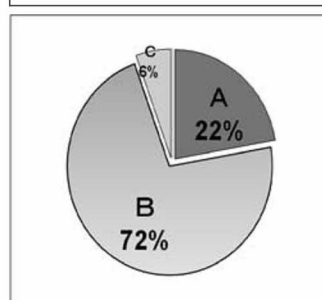
## IX 研究のまとめ

本年度取り組んできた研究体制の改善について、職員の意識を調査するために「現職研修のアンケート」を実施した。アンケートは全て「A：よくあてはまる、B：だいたいあてはまる、C：あまりあてはまらないD：まったくあてはまらない E：分からない」の5つから回答を依頼した。このアンケートの結果をふまえ、本年度の取り組みについて振り返る。

【実施期間 12月7日～17日 回答人数18人】

### (1) 研究の基本計画の見直し

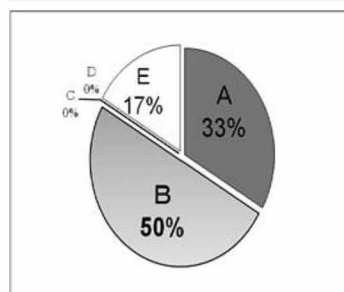
**設問1** 本年度より研究主題を「主体的な学びを続ける子の育成」とし、新しくめざす児童の姿を設定しました。こうした取り組みは、本校の課題をふまえたものになっていた。



「よくあてはまる」22%、「だいたいあてはまる」が72%という回答であった。研究推進委員会や隣学年部会で研究の基本計画について検討を重ね、本校の児童の実態を見つめ直し、新しい取り組みが理解されたものとする。

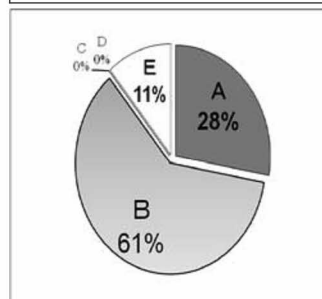
### (2) 研究体制の見直し

**設問2** 研究推進委員会は、研究をすすめる上で有効に機能をしていた。



「よくあてはまる」33%、「だいたいあてはまる」が50%という回答であった。メンバーの強化、隣学年部会との役割の明確化など、研究推進委員会が本校の研究の中心として機能していたことが分かる。

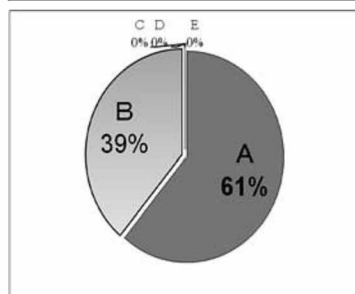
**設問3** 全体研の研究授業を5月、6月、9月、12月に実施しました。ねらいを明確化し、ゆとりをもった計画を組みました。こうした研究授業の計画は研究を深めることにつながっていた。



「よくあてはまる」28%、「だいたいあてはまる」が61%という回答であった。概ね肯定的である一方で「分からない」と回答した教員も約11%いる。その意見は「研究授業にかなり時間をとられている」といったものであった。授業者の負担感を減らすためにも、支援体制の在り方を検討していく必要がある。

### (3) 研究授業の改善への取り組み

**設問4** 全体研や部会研といった研究授業への取り組みは、各学年で協力して取り組みました。(例、先行授業や指導授業など) こうした取り組みは、研究を深める上で有効であった。



「よくあてはまる」61%、「だいたいあてはまる」が39%とであった。意見としては「前もって授業の課題を改善することができた」という内容であった。改善へ取り組みが有効であることを確認できた。

### (4) 今後の課題

#### ①隣学年部会におけるメンターの役割の明確化

本年度は、メンター教員と若手教員が学年体制であったため、協働して研究に取り組む体制が作りやすい環境であった。

来年度以降も同じ体制が続くとは限らない。今後は、「部会研」のねらいや実施時期なども明確にし全ての研究授業を関連づけていけるような計画にしていける必要がある。また、メンター教員が隣学年部会の中で授業づくりを支援していく体制にしていくなど、より大きな「チーム」を意識して授業づくりに取り組んでいくことが課題である。

#### ②事後検討会の方法について研修する機会をもつ

事後検討会では、授業改善に向けて多くの意見が出された。しかし、一部にやや具体性に乏しい意見もみられた。研究推進委員会において本年度の課題について再度見直し、一人一人がよりよい協議ができるよう研修会を企画するなど、さらに改善を重ねていく必要がある。

### Xおわりに

右上の<表7>は、本年度の研究を終えたメンター教員、若手教員の声である。

研究授業が授業をする教員だけに任せてしまうのではなく、「組織」として取り組んでいこうとする姿を見ることができた。メンター教員の経験と若手教員の情熱が上手に融合した研究をすすめることができた。こうした取り組みは児童たちの学びの姿にもあらわれ真剣に授業に取り組む様子がみられた。

この研究実践を通して、「教員は学校の中で伸びていく」ことをあらためて感じることができた。本校は平成27年に研究発表会が控えている。本年度の若手教員が、3年後の大きな力になるようさらに実践をすすめていく必要を感じている。

成果と課題をふまえつつ、よりよい校内研修の在り方について、全職員で協力しながら今後も改善を重ね

ていきたい。

#### 【<表7>本年度の研究を振り返って】

##### <メンター教員>

- ・共に考え、先行授業をすることで授業者の先生と一緒に授業づくりに取り組めた。
- ・小グループでの協議を通して、授業についての学びを深めることにつながった。

##### <若手教員>

- ・部会で取り組むことでいろいろなアドバイスをいただくことができて良かった。
- ・先行授業を参観したり、プレ授業をしたりしたことで、課題が明らかになり、一つ一つ課題を改善しながら授業づくりに取り組めた。そのことがとても勉強になった。
- ・発問や授業の課題についての検討でき、児童の思いを深く知ることができた。

#### 【参考資料・参考文献】

栃木県総合教育センター報告書『組織力の向上を図る校内研修の充実』、2012年

横浜市教育センター編著『授業力向上の鍵 ワークショップ方式で授業研究の活性化!』時事通信社、2011年

横浜市教育委員会編著『教師力向上の鍵ーメンターチームが教師を育てる、学校を変える!ー』時事通信社、2011年